

□平成 24 年度自然史博物館活動の評価について

(群馬県立自然史博物館専門委員 小池 啓一)

先日、平成 24 年度群馬県立自然史博物館活動の評価について、館から説明をいただきました。近年、いろいろな組織で自己評価・自己点検、外部評価が行われるようになりました。さて、自然史博物館の活動を評価するためにはどのような“ものさし”が必要なのでしょう。自然史博物館の使命とは何でしょうか。自然史博物館に共通する使命として、地球、場合によっては宇宙の成り立ちから現在の地球環境、あるいは地域の自然環境の成り立ちを理解するために研究、情報の蓄積を行い、展示を中心に広く教育普及活動を行うということになるのでしょうか。学校や研究所とは異なり、広く一般に開放されていることも特徴でしょう。群馬県という地域にある博物館ではありますが、その基盤には 46 億年の長い地球の歴史に基づく広い視野が必要です。その上で、群馬県立自然史博物館のミッション（使命）は何でしょう。本来そのミッションを実現するために博物館は設置されたはずですが、ミッションに基づき博物館の評価は始まります。しかし、当博物館で策定されている「使命と事業方針」は自然史博物館としての基本理念を十分に表現しているようには思えません。

ミッションを策定し、それを達成するための中・長期的な目標をもとに、年度ごとの活動目標を可能なものは数値で設定し、その達成度を評価します。群馬県立自然史博物館の基盤的使命、館の独自性（個性）、施設の規模等から見た客観的な評価基準の設定が必要です。館の施設設備、立地条件、人的資源、運営費等により期待される成果を達成しているかどうか、自己点検・評価すると共に、他の自然史博物館との比較も含め、より客観的な外部評価を行うことも必要です。

いずれにせよ、自然史博物館に期待される成果を達成するには、明確なミッションとそれを実現するための方策、地域の理解が必要です。さらに大切なことは、ミッションの実現には館の運営体制の継続性や情報の公開が必要です。群馬県の施設でありつつ、館のミッションを実現するためのガバナンスが必要不可欠です。館長は行政職であると共に、博物館のミッションに対する深い専門的理解が求められます。職員全体の共通認識は欠かせません。館独自の運営体制と共に、外からの支援体制作りも大切だと思います。これらを点検するための評価が求められています。

今回の博物館活動の自己評価のあり方が必ずしも十分なものだとは言えませんが、上記を踏まえて、さらにより明確なミッションの策定とその実現を図る出発点になることを期待しています。

(平成 25 年 10 月)